

Title	ヒュームの「感官に関する懐疑論について」
Author(s)	中谷, 隆雄
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 18 P.17-P.30
Issue Date	1985-01
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/3528">http://hdl.handle.net/11094/3528</a>
DOI	
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# ヒュームの「感官に関する懐疑論について」

中 谷 隆 雄

『人性論<sup>(1)</sup>』全三巻を通じて最も長いセクション「感官に関する懐疑論について (Of scepticism with regard to the senses)」(第一巻四部二節——以下IV§2と略記)の論述はかなり錯綜している。その原因としては、恒常性、整合性、同一性という概念の説明が差しはさまれていること、「<sup>(2)</sup>という原因で我々は物体の存在を信じる様になるか」というIV§2の課題に対して、感官、理性、想像力という能力別にアプローチしているかの印象を与えること、あるいは論点先取的な記述、用語法が考えられる。IV§2の論述の中心は、あくまで、物体に関して俗衆の説(vulgar system)<sup>(3)</sup>が形成され、俗衆の説から哲学の説(philosophical system)が形成されて行く過程である。そしてそれがIV§2の課題の答えになる。そういう意図がより顕わになる様にまずIV§2をまとめてみた。

—

俗衆(the vulgar)にとって物体(body)とは何か。それはまず知覚されなくても存在し続ける。そして知覚されることは別に存在する。前者を連続存在(contin'd existence)、後者を独立存在(independent existence)(あ

るいは別個な存在 (distinct existence) と呼ぶ (188)。連続存在し独立存在するのが物体である。連続存在とか独立存在という考え (opinion) を生むのは感官 (senses) ではない。<sup>(4)</sup> 感官は知覚を可能にするにすぎない。両存在の考えを生むのは理性 (reason) でもない。第一に、俗衆の考え方は「理屈のあるというものではない (unreasonable)」(193)。換言すれば、<sup>(5)</sup> 俗衆は「証明 (arguments)」(193) を用いない。第二に、俗衆は「哲学の説の様に」知覚と対象を区別せず、<sup>(5)</sup> 感じたり見たりする事物そのもの (the very thing they feel or see) に連続存在や独立存在を帰す。それゆえ一方から他方への推理 (reasoning) あるいは因果推理の余地がない (193)。連続存在と独立存在の考えは想像力 (imagination) が生む。知覚されるもの (適切な日本語が見当らないので「もの」と言うが、物体ではない。英語で表せば what we perceive の what である) には連続存在と独立存在を有するもの (passions and affections) は連続存在も独立存在もしない (194)。その区別を想像力は恒常性 (constancy) と整合性 (coherence) を用いて行う。山、家、樹木が見えている。眼を閉じる。再び眼を開ける。山、家、樹木は眼を閉じる前と「少しの変化もなく (without the least alteration)」(194) 見えている。これを恒常性という (194-5)。部屋の暖炉に火がある。一時間程外出する。そして部屋に戻る。暖炉にもはや火はない。これを整合性という。整合性には変化が伴うが、変化の仕方に「規則性 (regularity)」があり、俗衆はそれに「なじんでいる (accustomed)」(195)。想像力は知覚されるものの中から恒常性が整合性のあるものを選んで連続存在と独立存在を帰すのである。ただ、恒常性と整合性は対等ではない。整合性の役割は補助的なもので、恒常性が中心になる。<sup>(6)</sup> ところで恒常性を有するということは中断の後に知覚されたものが中断の前に知覚されたものに類似しているということである。俗

衆はその「類似性 (resemblance) のゆえに」両者に同一性 (identity) を帰す (199)。それでも中断は「完全な同一性に反する」(199) ので、中断を「取り繕う (disguise)」(199) ため、太陽や大海は見られていなくても存在し続けると俗衆は想像する。中断と同一性の「心的葛藤」<sup>(89)</sup>を解消しようとして、想像力が「連続存在の fiction」(209) を作り出すのである。<sup>(9)</sup>

俗衆は連続存在を想像するだけでなく、それを「信じる (believe)」(208)。即ち連続存在の「信念 (belief)」を持つ (208)。連続存在の信念が生じる過程は「印象 (impression)」と「観念 (idea)」で説明できる。信念とは「活気ある観念 (lively idea)」(96) である。連続存在の観念は「活気 (vivacity)」(208-9) を得なくてはならぬ。その仕方には二通りある。連続存在の観念は印象の同一性と中断を「取り繕う」ものとすると、そのとき印象と観念の間には自然的関係 (natural relation) (近接と類似) が成立している。自然的関係があると、想像力は印象から観念へ「円滑 (smooth)」に移行する。移行が円滑だと、印象の「活気のかかなりの部分 (a considerable share of the vivacity)」が観念に移る (208)。かくして連続存在の観念が活気を得て信念となる。第二に、恒常性を有する印象に俗衆は同一性を帰すが、その事例は「莫大な数 (a vast number)」<sup>(10)</sup> になるので、同一性を帰す「傾向性 (propension)」が出来る (208)。むしろに同一性と中断の「矛盾を避ける」(208) ために俗衆は連続存在を帰すが、それも「莫大な数」なので連続存在を帰す傾向性が出る。連続存在を帰す傾向性の起源は印象である。従って印象の活気が連続存在の観念に移され、その結果連続存在の信念が出来る。ところで独立存在と連続存在の間には「密接な関係 (intimate connection)」(210) がある。独立存在が成立すれば必然的に連続存在が成立し、<sup>(11)</sup> 連続存在が成立すれば必然的に独立存在が成立する (188)。連続存在と独立存在を有するのが物体である。従って、連続存在

の信念が説明されると、同時に独立存在の信念も、そして物体の存在の信念も説明されたことになる。即ち俗衆はいかにして物体の存在の信念を持つかがここまでに示されたことになる。

しかしある種の「実験(experiments)」について「わずかの反省と哲学(a very little reflection and philosophy)」を行うと、俗衆の説が「誤り(error)」であることが判明する(210-11)。例えば指で眼球を押すと知覚されているものは二重になる。しかし二重になったものの両方に連続存在を帰することはできない。かと言ってどちらか一方に帰すこともできない。両方共「同じ本性(the same nature)」(211)だからである。詰まる所どちらにも連続存在を帰すことはできない。<sup>(13)</sup>連続存在しなければ独立(independent)存在しない。従って知覚されるものは知覚の仕方<sup>(14)</sup>に依存(dependent)する。他の実験もそのことを示している(211)。要するに知覚されるものに連続存在と独立存在を帰すのは誤りである。俗衆の誤りを避けるため哲学者は存在者を知覚(perceptions)と対象(objects) (存在者としての知覚、対象には傍線を入れた)の二種にする。知覚は「中断があり(interrupted)」、「依存的」である(211, 215)が、対象は同一性、連続存在、独立存在を「保持する(preserve)」(211)。この二重存在(double existence)の説を生むのは理性ではない(212)。ある存在から別の存在を推理するのは因果関係の推理である。因果関係は恒常的結合の経験があつてはじめて認められる。ところが知覚と対象の恒常的結合は観察すらできない。対象が観察できないからである。それゆえ理性は知覚から対象を推理することはできない。「positiveな証明」(212)はできないが、<sup>(15)</sup>二重存在の説を生むのは想像力でもない。二重存在の説はむしろ理性と想像力の葛藤から生じる。(俗衆の様に)想像力に全幅の信頼を寄せて、知覚されるものは恒常性のゆえに中断にかかわりなく同一性、連続存在、独立存在を有するという確信があれば、二重存在の説に導かれない。あるいは逆に、理性に全幅の信頼を寄

せて、たとえ恒常性があつても、知覚されるものは中断ゆえに同一性を有さず、またいくつかの実験から、連続存在、独立存在も有さないという確信があれば、二重存在に導かれない。想像力と理性の両方を「満足させ (please)」（215）ようとして二重存在の説が生じる。まず知覚されるものを知覚とし、これには同一性も連続存在や独立存在もないとして理性を満足させる。そして知覚とは別に対象（即ち物体）を想定して、これに同一性、連続存在、独立存在を帰し、想像力を満足させる（215）。この二重存在の説は、想像力に全幅の信頼を寄せた俗衆の説があらかじめあり、それに理性の要求が対立してはじめて生じるので、哲学の説は俗衆の説から生じると言える<sup>(16)</sup>（213-4）。存在が一旦二重になると、哲学者は想像力によって（216）、対象と知覚に因果関係を帰す<sup>(17)</sup>（217, 189）。さらに両者に類似関係も帰す<sup>(18)</sup>（217, 189, 191）。哲学者が存在者を二重化した段階では対象は知覚され得ないものであったが、対象と知覚の関係が考慮される段階になると、対象は知覚に類似したものになってしまう。想像力は「その観念すべてに先行する何らかの知覚から借りる」（216）からである。対象も所詮想像力の fiction 即ち観念なのである（634）。観念は知覚の一種である。哲学者は対象を想定することで、結局「新しい組の知覚 (a new set of perceptions)」（218）を作ったにすぎない（cf. 217）。想像力を宇宙の果てまで馳せてみても、「我々は自分の中から一歩も外へ出ることができないし、自分という狭い区画にかけて現れた知覚とは別種の存在を想うことができない」（67-8）。哲学者の説はその証しである。

二

IV §2（最後の引用は II §2）には俗衆と哲学者の二つの物体論が形成される過程が右の如く記されている。しかし

形成された物体論は共に理論として満足なものではない。俗衆の物体論はある種の「実験」を引合いに出して理性が覆す。哲学者の物体論では知覚でないはずの対象が知覚になる。俗衆の物体論もそこから生まれた哲学者の物体論も共に「誤り」(210, 218)である。ただ哲学者の物体論の誤りにはその「療法 (remedy)」(218)がある。哲学者は知覚と対象の二重存在の説を作つて物体として対象を想定したにもかかわらず、対象は知覚でしかあり得ないことが判る。即ち哲学者は物体の存在を信じようとして信じていることができないのである。この懐疑論的事態は別の議論によつてではなく、議論そのものに「怠慢かつ不注意 (carelessness and in-attention)」(218)であることによつて克服される。そして「外的世界と内的世界 (an external and internal world) の両方が存在する」(218)と再び信じていることができる様になる。とは言え、哲学者の物体論の誤りに対する療法が議論によつていないこと、そして二つの物体論が誤りとされながら誤りでない物体論を『人性論』に捜すことができないことから、ヒューム自身物体の存在に懐疑的ではないかという思いは完全にぬぐい切れない。IV §2の趣旨、ひいては『人性論』の趣旨を思い出したい。IV §2の論述は限定された前提に基づく論述である。人間は感官によつて知覚できる、そして人間の心には想像力と理性が備わつていて、という前提のみが与えられたとして、人間はいかにして物体の存在を信じる様になるかという課題にアプローチしたのがIV §2なのである。IV §2でのヒュームの「主要関心事 (primary concern)」は人間であつて物体ではない。<sup>(19)</sup>IV §2に限らない。『人性論』は「精神哲学 (moral philosophy)」(xviii)であり、『人性論』全篇を通じてヒュームの「主要関心事」は人間なのである。物体についてまず俗衆の説が生じる。俗衆の説の誤りから哲学の説が生じる。哲学の説が懐疑論に陥る。「怠慢と不注意」によつて懐疑論が克服され再び物体の存在が信じられる。以上はすべて精神哲学内のことである。「怠慢と不注意」ゆえに物体の存在が再び信じられるのは

精神哲学の前提のもとでの話である。精神哲学を離れてはヒュームは物体の存在を「当たり前前のことと考え (take for granted)」(187) する。

IV §2 の理解は困難であり、時に誤解を生む。その原因としては冒頭に挙げたものの他に、自ら設定した精神哲学の前提をヒュームが守っていないことがある。前提を守れば登場しないはずの存在者が登場する。いかなる種類の知覚も知覚として「同じ土台の上に (on the same footing)」(192) あることを示そうとして、すべての知覚は「物体の諸部分の組成と運動から生じる」(192-3) とヒュームは説明する。あるいは、相異なる知覚が「相異なる方向の精気 (spirits) を求め」(203) する。また、理性は「実験」によって、「すべての知覚は我々の器官にそして我々の神経と動物精気に依存している」(211) ことを示す。「物体の諸成分の組成と運動」、「(動物) 精気」、「器官」、「神経」は精神哲学としての『人性論』には登場しないはずの存在者である。『人性論』第一巻の始めで、「感覚 (sensations) の吟味は精神哲学者よりも解剖学者や自然哲学者に属する」(8) と宣せられている。「感覚の吟味」とは感覚の印象の「自然的物理的原因 (natural and physical causes)」の吟味である (275-6)。即ち感覚の印象の「自然的物理的原因」を語るのには解剖学や自然哲学の領分であって精神哲学の領分ではない。にもかかわらずヒュームが IV §2 で「動物精気」等に言及しつつ知覚の原因を説明しているのは自ら設定した前提を忘れていたと解釈する他ない。

三

「誤り」でないヒューム自身の物体論は『人性論』にない。しかしヒュームにとって物体とはどういうものであ



ったかという問いは成り立つし、そのための材料も僅かだがある。IV §2にある俗衆の説と哲学の説の二つの物体論は確かに両方共「誤り」であり、そこから物体に関するヒュームの positive な主張は窮えない。しかし negative なことなら言える。知覚に加えて想像力と理性が与えられていると前提して、物体について真な説を形成できない、というのがIV §2でのヒュームの結論である。さらに一般化すれば、心に与えられたもののみから物体を導き出すことはできない、と言える。ヒュームにとっては物体とはまず心に与えられたもののみから導き出すことのできない類いのものなのである。知覚に焦点を合わせて現代的に表現すれば、ヒュームは「反現象論者(anti-phenomenalist)」である。<sup>(21)</sup>

ヒュームにとって positive には何が物体なのか。印象や観念が物体ではあり得ない。印象と観念はIV §2の哲学者の知覚に相当するからである。哲学者が知覚と別個に対象を物体として要請した様に、ヒュームの物体も印象や観念とは別な所に求めるべきである。観念の存在は印象に依存している(5)ので、知覚外のものに直接関係し得るのは印象の方である。感覚の印象は「最初、知られない原因(unknown causes)から生じる」(7)と『人性論』の始めにある。感覚の印象の原因が「知られない」というのは、全く不可知なという意味ではない。『人性論』第一巻ではせいぜい感覚の印象が「対象から直接に生じるか、心の産出的能力(creative power)によって産み出されるか、我々の存在の創造主に由来するか確実に決定するのは不可能」(84)という程の意味である。<sup>(23)</sup>しかし『人性論』第二巻冒頭で早速確言されている。「感覚の印象は、先行の知覚なしに、身体の組成から、動物精気から、あるいは対象が外的器官に働きかけることから魂のうちに生じる」(275)と。「外的器官に働きかけること」によって「魂のうちに」感覚の印象を生む対象がヒュームにとっての物体である。(無論「身体」も「動物精気」も物体である)こ

の物体の存在をヒュームは固く信じている。IV §2で自ら設定した前提を忘れて動物精气等に言及しつつ知覚の原因について語っているのがその何よりの証左である。ただヒュームに物体はあるが物体論はない。物体を、そして物体と印象の関係を探究するのは精神哲学者の仕事ではなく、自然哲学者や解剖学者の仕事だからである。

物体論の有無は別にして、ヒュームの二元論的世界とIV §2に登場した哲学者の二重存在の世界は似ている。いずれの世界も対象と知覚の二種のもが存在し、そして前者が原因となり後者が結果となる。ただ相違点は二つある。ひとつは、ヒュームの知覚が感覚の印象すべてであるのに対し、哲学者の知覚には感覚の印象のうちの「外的 (external)」(195, 199, 205, 216-18) なものしか含まれない(快苦等は除かれている)。哲学者の知覚が外的なのは、知覚を起点としていかに物体に到達するかというIV §2の問題設定の必然的な結果である。哲学の説は俗衆の説があつてはじめて生じる。俗衆は知覚のうちから連続存在と独立存在が帰せられるもの(物体となり得るもの)を恒常性と整合性によってすでに選り出している。その結果として哲学者の知覚は外的なのである。もうひとつは、哲学者の知覚はその対象に類似しているのに対し、ヒュームの知覚が(快苦等は別にしても)その対象に類似しているという確証はない。以上の相違点を考慮に入れてもなおひとつの問題が残る。IV §2でヒュームは哲学者の説について、知覚から対象を因果関係によって導き出すことはできない、と言っていた(219)。対象は観察できないので、知覚と対象の恒常的結合という経験があり得ないからである。しかし、原因結果とも知覚可能でないと因果関係は成立しないという見地に立ってしまうと、哲学者のみならずヒューム自身不都合なことになる。感覚の印象と対象の因果関係も成立しなくなるからである。感覚の印象と対象の因果関係を「吟味」するのは自然哲学者や解剖学者の仕事であつたはずである。彼らはいかにして自分の仕事を遂行するのか。そもそも遂行できるのか。

哲学者の対象は因果推理によつて導けず、理性と想像力の葛藤から導かれる(213-4)が、一旦導かれてしまうと知覚と対象の間に因果関係が想定される。ヒュームも感覚の印象という知覚と対象の因果関係を考へている。しかし因果関係の基礎は両者で違つている。哲学者の場合、存在者が二重になつた後に想像力によつて対象と知覚の間に因果関係が帰せられ(217)たにすぎない。それに対しヒュームの場合は、対象の存在も感覚の印象と対象の因果関係も議論抜きに当然のことと考へられている。すべての存在にはその原因があるという命題は論証できない、とヒュームは確かに言つている(79-80)。<sup>(25)</sup>それゆゑにすべての存在に原因があるとは限らない、とヒュームが考へているなら、感覚の印象に「先行の知覚がない」(975)からと言つて、その原因を対象に求める必要はなく、感覚の印象を無原因なものにしておいてもいいはずである。が、やはり実際問題としては、すべての存在には原因があると考えざるを得なかつた様である。<sup>(26)</sup>そうだとすると、感覚の印象にも原因がなくてはならない。しかし感覚の印象の原因を知覚に求めることはできない。既述の通り、対象の存在は「当たり前のことと考へ」られている。それゆゑに感覚の印象の原因は対象になる。かくして対象と感覚の印象の因果関係も「当たり前のことと考へ」られているはずである。

ヒュームにとつては対象の存在及び対象と印象の因果関係は確たるものである。だからと言つて無論対象が知覚可能となるわけではない。ただ右の事情が念頭にあればアンダーソンの提案がより好意的に理解できると思う。<sup>(27)</sup>アンダーソンは対象の知識を得るための、しかもヒューム哲学内で可能な二つの方法を提出している。対象の知識が得られると、対象と印象の因果関係の知識を得るのに困難はない。アンダーソンが挙げている方法のひとつは「厳格な吟味(exact scrutiny)」(132)である。訓練された観察者と訓練されない観察者は違ふ。訓練された観察者は

「厳格な吟味」によって、「反対の結果 (a contrariety of effects) は常に反対の原因をほめかし (betray) しており、原因相互の妨害と対立に由来していることに気付く」(132)。例えば時計が急に止まっても、訓練されない観察者には判らない原因が訓練された観察者には判る (132)。自然哲学者たちは観察眼が訓練されているだけではない。光学機器も使う。顕微鏡や望遠鏡は「裸眼には単純で非複合的に見える印象に部分を与え、なおかつ以前は知覚不可能であったものを (知覚の) 最小単位に格上げする」(38) (括弧内筆者) からである。もうひとつの方法は「健全な理性 (sound reason)」である。「感官に現れる物体より遙かに微小な物体が存在することを確信させる」のは、ヒュームによれば、「健全な理性」である (48)。自然哲学者たちは「健全な理性」を用いて「因果結合がみかけ上不確実なのは相反する原因の隠れた対立によるという公準 (maxim)」(132) を立てる。そうすることによって彼らは「自然哲学の仮説を構成している」<sup>(28)</sup>のである。アンダーソンの挙げた方法と基本的に性格は変わらないが、自然哲学者たちの仕事という問題に対してさらに明確な解答になると思える言明が IV §5 にある。そこでヒュームは、「印象に当てはまらない対象間の結合や背反は経験からの変則的な種類の推理 (an irregular kind of reasoning from experience) 以外の原理によつては発見できない」と述べ、「変則的な種類の推理」として注に再び IV §2 の「整合性」を挙げている (242)。「整合性」とは、恒常性と並んで、知覚されるものうちから連続存在と独立存在を有するものを選ぶ (俗衆のしかも補助的な) 基準であった。知覚に恒常性あるいは整合性があれば、俗衆は想像力によつて連続存在 (そしてその必然的な結果として独立存在) を帰した。即ち知覚されるものの間隙を連続存在という fiction で結ばせるものひとつが整合性であった。IV §5 でヒュームは「知覚されるもの」を感覚的印象に、「連続存在という fiction」を実在の対象に置き換える。今度は感覚的印象に整合性を帰すことによつて対象に

言及するのである。整合性を帰すとは一般的に言つてどういふことなのか。因果性を帰すことに似てはいるが同じではない。因果性は習慣に由来し、習慣は知覚の規則的継起に基づく。従つて因果性は知覚されるものの規則性である。それに対し、整合性は知覚されないものの、あるいは知覚されないものを含む規則性である。整合性を帰すことは「単なる知覚に於て観察される以上の規則性」(197) を帰すことであるともヒュームは言つている。それゆえ知覚されない対象を自然哲学者たちが探究するといふのは、対象に整合性を見出し、そしてそのことによつて単なる印象に於て「観察される以上の規則性」を対象に、あるいは対象と印象の間に帰すことである。印象に観察される以上の規則性を帰すのは、因果性を見出すことではなく、アンダーソン<sup>(29)</sup>の言葉を借りれば、まさしく「自然科学の(因果的作業)仮説を構成している」(括弧内筆者) ことになると思う。

#### 四

IV §2 にヒュームの物体論はない。しかしヒュームにとつて物体がどういふものであつたかを探る手がかりは僅かながら含まれていたと思う。IV §2 では、俗衆にとつて「物体」は何を意味するのか、表象説、因果説を採る哲学者にとつて「物体」は何を意味するのかという二つの問題が扱われていると見ることもできよう。前者にとつての「物体」は連続存在と独立存在が信じられるものであり、後者にとつての「物体」は両存在が信じられなかつた知覚の原因・原型となるものである。そしてこの二つの「物体」を語りながら、あるいは計らず(動物精気等への言及)あるいはひよつとしたり意図的に(整合性についての長い説明)物体に関するヒューム自身の考えが表われているのがIV §2 だと思ふ。

## 注

- (1) 使用したテキストは David Hume, *A Treatise of Human Nature*, L. A. Selby-bigge (ed.), second edition with text revised by P. H. Niddich (Oxford, 1978) (大概春彦訳『人性論』岩波文庫 一九四八—五二年)で、引用箇所、該当箇所は文中に頁数のみ記した。
- (2) Norman Kemp Smith, *The Philosophy of David Hume*, (London, 1941), p. 449.
- (3) 意図して形成された説くはなへ、俗衆が意図せず形成してしまつてゐるカテゴリーが考えらるゝ。『説』でも。
- (4) その理由は(1)に挙げられてゐる (191-2)°
- (5) cf. Smith, *ibid.*, p. 114.
- (6) cf. 神野慧一郎『ヒューム研究』ミネルヴァ書房 一九八四年 p. 299. 恒常性は「制限付きの整合性 (the limiting case of Coherence)」と言える。H. H. Price, *Hume's Theory of the External World* (Oxford, 1940), pp. 65-6, cf. pp. 60-71. またプライスの指摘の通り、ヒューム自身は両特性を互いに還元できないものと考えてゐる様に思える。ibid., pp. 60-71. そして整合性の方はIV§2の結論部に至つてはほとんど無視されてゐる。ibid., p. 38.
- (7) 同一性の観念とは見方 (view) によつては多数性 (number) でも単一性 (unity) でもその観念である (201)°。ただヒュームの同一性の観念は(1)つかの問題を孕んでゐる。Jonathan Bennett, *Locke, Berkeley, Hume*, (Oxford, 1971), p. 342. Barry Stroud, *Hume*, (London, 1977), p. 104 John P. Wright, *The Sceptical Realism of David Hume*, (Manchester, 1983), p. 67.
- (8) Stroud, *ibid.*, p. 114.
- (9) 知覚されるものの連続存在という考えは哲学の概念を用いて分析してみても論理的に可能であることをヒュームは示そうとつてゐる (207-8)°
- (10) 莫大な数の事例を蓄えるのは記憶であるが、記憶の力と活気は記憶をして論証の確かさに匹敵せしめる程である (153)°
- (11) 実際は独立存在が成立したからと言つて連続存在が成立するとは限らなう。Price, *ibid.*, p. 18.
- (12) cf. 神野 *ibid.*, pp. 308, 326.
- (13) cf. Aleksandar Pavković "Hume's argument for the dependent existence of perceptions: an alternative reading" *Mind*, Vol. 91, 1982, ch. II.

- (14) cf. Robert F. Anderson, *Hume's First Principles* (Nebraska, 1966), ch. 5.
- (15) もえて言えは、<sup>14</sup>「知覚は中斷してあり、<sup>15</sup>さへら似てゐるつも互ひに相異なる」(212-3)とて、<sup>16</sup>「想像力にちをわしくなるのである」。
- (16) cf. Stroud, *ibid.*, p. 113.
- (17) 「すでに (already)」因果関係が歸せられてゐる (217) とあるが、前に言及されてゐない。
- (18) 二つもの間に何らかの關係 (因果) が成立してゐるとも、<sup>17</sup>さらに新しい關係 (類似) を加えることによつて二つもの「結合 (union)」を完全にしようとする「強い傾向性」も人間にはある (217, 237)。
- (19) Stroud, *ibid.*, p. 96.
- (20) Wright, *ibid.*, pp. 69-70.
- (21) John. A. Passmore, *Hume's Intentions* (Cambridge, 1952), p. 90.
- (22) cf. Smith, *ibid.*, p. 451.
- (23) Anderson, *ibid.*, p. 102.
- (24) ネットの指摘を通ひ、IV 2ではある箇所 (190-1)を除いて空間的な意味はない。Bennett, *ibid.*, p. 314.
- (25) cf. Anderson, *ibid.*, p. 102.
- (26) 『人性論』第一卷三部の八節から一二節にかけてはそれを前提している。神野 *ibid.*, p. 252.
- (27) Anderson, *ibid.*, pp. 107-10.
- (28) Anderson, *ibid.*, p. 109.
- (29) cf. Anderson, *ibid.*, p. 104.